様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　28 日現在

機関番号：３２６５７
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７６０４８３
研究課題名（和文）　２０世紀初頭における非西洋様式の受容に関する研究

研究課題名（英文）　Study on the reception of non-Western architectural style in the beginning of the 20th century

研究代表者
横手　義洋（YOKOTE　YOSHIHIRO）
東京電機大学・未来科学部・准教授
研究者番号：10345100

研究成果の概要（和文）：ボストンのクラム・アンド・ファーガソン事務所には、建築家ラルフ・アダムス・クラムが日本に対して提案した三度目のプロジェクト、津田塾大学キャンパス計画に関する図面が保管されている。和風意匠の採用という一貫した信念と、アール・デコ的細部を示す作として貴重である。このクラムの建物配置は、その後実施された佐藤功一案に継承され、現在の津田塾キャンパスの骨格を決めていることもあきらかになった。

研究成果の概要（英文）：A Bostonian architect, Ralph Adams Cram, proposed three architectural projects to Japan. Tsuda College project is the last one. The original drawings are lost but some reproductions are kept in the Cram and Ferguson Office. These are the precious historical materials which show Cram's consistent use of the Japanese architectural style as well as Art Deco detail. Cram's basic concept of plot plan interestingly remains in the actual Sato Koichi's campus.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠
キーワード：様式

１．研究開始当初の背景

本研究は、２０世紀初頭の西洋建築様式（主としてイタリアのリバティ様式／アール・ヌーヴォー）に関連して、西洋世界が非西洋世界に向けたまなざしや関心の視座から再考を試みるものである。一般に、この時代の建築は西洋文化圏の自立した脱歴史様式の展開として説明されることが多いが、本研究では西洋世界が非西洋世界に新たな造形上の刺激を積極的に求めた点を重視する。そうした新奇の造形が、どのような施設、どの階層に受け入れられたかを追うことにより、建築様式の制作論や形態論にとどまらず、様式の社会的意味すなわち様式の社会的受容論をめざしたいと考える。

２．研究の目的
１９世紀末から第一次大戦までの激動の時代を理解する上で、建築表現、建築様式の考察は、社会の複雑な構造や認識のあり方までを理解する道具となりうる。たしかに、非西洋圏から持ち込まれた新奇の要素は、西洋世界に持ち込まれた時点で本来の意味を失ってしまう。同時に、場所や文脈を変えることでまた別な意味を創出し、異文化が混じり合い交流するときに、思いもよらない相乗効果を生む。その複雑なメカニズムを、工業化時代の様式の社会受容論として構築することが、新たな近代建築史研究に有益であると考える。
本研究は、１９世紀の折衷主義、２０世紀初頭のアール・ヌーヴォーに対する既往の見解を、西洋世界に完結した新造形の運動とだけ見るのではなく、西洋圏と非西洋圏との交流の成果、とりわけ非西洋文化の情報量増大の帰結として理解する。これによって、世紀の移行期に、折衷主義やアール・ヌーヴォーという用語だけでは説明しきれない様式の傾向を追求する。
以上の問題意識のなかに、欧米世界における東洋趣味、日本趣味も含まれる。

３．研究の方法
研究の方向性は大きく２つに分かれる。イタリアのアール・ヌーヴォー（いわゆるリバティ様式）における東洋趣味の考察を深めること。もうひとつは、米国東海岸における東洋趣味、とりわけ日本趣味の考察を深めることである。いずれにおいても、現地の建物調査、当時の建築雑誌等を中心に文献調査をおこなった。

４．研究成果
（１）建築家ダロンコとリバティ様式
イタリア・リバティを代表する建築家ライモンド・ダロンコは、トリノ装飾美術万博（１９０２）において優美な建築群を設計した。この万博はアール・ヌーヴォーがはっきりとした形でイタリアに現れた象徴的なイベントであり、会場の中央ロトンダは溢れんばかりの装飾で飾られ、左右に低い両翼を張り出させていた。こうしたダロンコの建物は、その建築的特徴がウィーンのゼツェッションに大きく影響されていたとはいえ、リバティ様式のわかりやすい実例に位置づけられる。一方、ダロンコがウーディネに建てた霊廟（１８９８）は、リバティよりも折衷主義的傾向が顕著である。縦勾配の壁、エジプト建築のような頂部といった要素は、ダロンコにオリエントの建築的指向があったことを思わせるものである。

（２）建築家クラムと日本建築
ラルフ・アダムス・クラム（１８６３－１９４２）は、日本建築に強い関心を寄せた米国人建築家だった。ボストンのアーツ・アンド・クラフツ運動に参加したほか、来日経験のある宣教師オーサー・ナップの自邸として日本風住宅を設計してもいる。クラムが日本に提案した作品は、いずれも実現にはいたらなかったが、帝国議会議事堂、立教大学キャンパス、津田塾大学キャンパスの三作が知られている。
いずれもが東京で建てられることを想定した建築プロジェクトである。帝国議会議事堂案（１８９８）は、クラム訪日の直接のきっかけとなったプロジェクトで、自伝『建築における我が生涯』（１９３６）にスケッチ図版が掲載されたことで、米国の先行研究にも度々引かれる。次に、立教大学キャンパス計画（１９１１）。これは、最近、文献史料によってクラムの関与があったという事実が報告されたばかりであるが、残念なことに図面が残っていないため、プロジェクトの建築的な分析が困難である。最後に、津田塾大学キャンパス計画。こちらの図面は、クラム・アンド・ファーガソン事務所に写真複製の形で一部現存しており、『ラルフ・アダムス・クラムとその事務所の建築』に数枚の図面が紹介された。クラムと日本の接点が帝国議会議事堂以外にあった証拠を示した点で非常に重要な成果だが、これまで図面に関する詳しい分析がされないままであった。
２００７年にはじめて公開された津田塾大学キャンパス計画のイメージは、現在クラム・ファーガソン事務所代表のイーサン・アンソニー氏が、事務所の建築図面を整理し出版した。ただ、ここに載せられた図面は限定的であり、また、情報に誤りがある。まず、場所は「北海道」ではなく、「東京　国分寺」。これは図面に、ローマ字で記載がある。また、制作年も「１９１９年」ではなく、修正が必要である。

（３）津田塾キャンパス計画図面の考察
現存する４枚の図面に付された整理番号がＳ－１からＳ－１７に渡っていることから、クラムが提出した十数枚の図面という『女子英学塾四十年史』の情報とも一致し、少なくとも１７枚の図面が存在したことを証拠づける。また、Ｓ－１が全体配置図であり、Ｓ－１４、１６、１７がスケッチパースであることから、Ｓ－１に続く数枚は建物の平面図、立面図（場合によっては、断面図等）に割かれていたと考えられる。全体図において各建物は平面外形が示されていただけであったが、鳥瞰図に描かれる外観を見るかぎり、各棟の平面計画までがしっかりと詰められていたと考えてよいだろう。たとえば、学生寮

Ｃの南西部は二階がセットバックした上で、吹き放ちのベランダとされているほか、外階段、回廊、煙突等の位置に図面間の矛盾はない。図面に付された日付は、１９２８年８月１６日、１７日、２０日、２３日とどれも異なる。クラムの計画案が１９２８年１０月に米国より届けられたこと、さらに当時の航行時間を加味すると、その２ヶ月前の日付は図面がぎりぎりの完成であったことを示している。
図面に付された整理番号と日付の順序は整合しないので、全図面が揃った時点で通し番号が振られたと考えられる。三枚のパース、「鳥瞰図」、「学生寮全景」、「本館正面詳細」については、日本人もしくは日系人と思しきT.マツモトなる人物の署名が入っている。クラム・アンド・ファーガソン事務所にかつて日本人所員がいたという事実は確認できないが、キャンパスの雰囲気、和風建築表現を体現する重要な任に、正確な和風の描写と表現を期待されて T.マツモトが登用されたと考えられる。

（４）クラムの津田塾大学キャンパス計画案
津田塾の建物は、T.マツモトに描かせたことが功を奏したのか、素直に入母屋か寄棟の屋根になっているほか、スケッチでも見上げのアングルによって屋根の重厚さは影を潜め、むしろ簡素で繊細な表現とされた。本館は、キャンパス表現の中核であり、正門からのアイストップとしてわざわざ望楼が立ち上げられている。高欄の下に板張りの袴腰があることから、鐘楼のイメージがあったのかもしれない。大きな白壁に比して小さな開口部は、あきらかに城郭の風情を強調している。ただし、城郭的な閉鎖性は本館の玄関部のみで、両翼部、あるいは、その他の建物に目を転じれば、適度に開口部が取られている。その開口の度合いは米国のゴシック・カレッジと比較しても同程度であり、和風表現とはいえ大学施設に必要な要件はきちんとおさえられていたことがわかる。
津田塾小平キャンパス計画として描かれた建物を見てくると、クラムのなかで日本の伝統意匠への敬意が変わらず保持されていたこと、そして、その変わらぬ想いの中にも、米国の建築家のキャリアを特徴づける要素が確実に浸透していたことがわかる。すなわち、キャンパス校舎には全体の基調となる和風表現の端々に、やはりそれまでに建築家が手がけてきたゴシック・カレッジの伝統、また同時に、米国で流行しつつあったアール・デコ表現の予兆が仄見えていた。
伝統とモダン・デザインの共存は、玄関扉、二階の開口部に見てとれる。アンソニー氏はここにガラスの透明性や反射性といった近代的表現を強調するが、むしろ窓枠で形づくられる幾何学パターンの方にこの時代のクラム建築の特徴が表れているように思われる。大小の正方形、円形、星形が組み合わせられた幾何学パターンは、アール・デコに通じる近代的で抽象的な造形センスを思わせると同時に、確実にクラムが米国で手がけてきた伝統的ゴシック・カレッジのステンドグラスにも通じている。この時代のクラム建築に、ゴシックか、アール・デコか、あるいは、伝統的表現か、近代的表現か、という二者択一の議論をしてもあまり得られるものはなく、むしろ、伝統から新しい造形への緩やかなつながり、あるいは、両者の分かちがたい共存を積極的に認めることこそ重要であるように思われる。
津田塾大学キャンパス計画はクラム・アンド・ファーガソン事務所としては最終的に仕事にならなかった作品である。しかしながら、わずか４枚の写真複製ではあるが、キャンパスの雰囲気、和風の外観意匠を伝えるスケッチだけが史料として残された。今回の調査で、１９２８年８月１６～２３日の図面制作、日系人T.マツモトの関与、クラムによる和風意匠へのこだわりとその時代性があきらかになった。また、クラムと津田塾の接点、小平キャンパスにクラムが残した痕跡についてもある程度検討ができた。実現にはいたらなかったプロジェクトではあるが、建築における日米文化交流の足跡として貴重なものである。

（５）建築家グリーン＆グリーンと日本建築
クラムの例に象徴されるように、ボストンやセイラムを中心とする米国東海岸では、日本建築が建築家によってかなり早い段階から文化摂取されるとともに、新鮮なデザイン・ソースとして受け止められた。
２０世紀初頭には、西海岸においても、グリーン＆グリーン、フランク・ロイド・ライト、ルドルフ・シンドラーらの手がけた住宅に日本建築の意匠が少なからず認められる。グリーン＆グリーン設計のギャンブル邸は、バンガロースタイルと称されるアメリカ住宅の典型例とされるが、玄関、内部意匠、ベランダにおいて、日本建築を思わせる細部が散見される。ただし、建築家自身が日本へ出向いた事実はない。
文献調査の結果、グリーン＆グリーンの建築に日本趣味を認めたのは、同時代の米国のジャーナリズムであり、さらに同じ傾向がフランスでも見られる。欧米全体に広がるジャポニスムの影響下に米国の一建築家が捉えられた格好である。こうした出版物がやがて日本にも入ってゆく。それは史的評価の手がかりとなるだけでなく、次世代の建築家の制作にも少なからず影響を与えることとなる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①横手義洋、建築家ラルフ・アダムス・クラムの津田塾大学キャンパス計画に関する研究、日本建築学会計画系論文集、査読有、671 号、pp.143－148、2012 年１月

〔図書〕（計１件）
①磯崎新、横手義洋、岩波書店、散種されたモダニズムー「日本」という問題構制、2013、271

６．研究組織
(1)研究代表者
横手　義洋（YOKOTE YOSHIHIRO）
東京電機大学・未来科学部・准教授
研究者番号：10345100